

16) ガンピとセンノウ=岩菲と仙翁

ガンピといわれる植物には二つある。一つはジンチョウゲ科の落葉低木で、本州の中部以西の暖地に自生し、これは和紙の原料になる植物として、昔から「紙の木」として知られている。高さは2m ぐらい、漢字では『雁皮』と書く。雁皮紙は丈夫で虫などに喰われることも少なく「鳥の子紙」や「薬袋紙」それに「お札」などにも用いられた。単に「斐紙」とも呼ばれ、その記録は正倉院の文書などにも見ることができる。しかし栽培が難しく今では他の紙に替ってしまった。

もう一つがこのガンピでナデシコ科センノウ属の多年草である。原産地は中国で『春剪羅』もしくは『夏剪羅』といわれている。「剪」という文字は「切る」という意味で、これは後述する「花卉の切り込み」を表現したものであろう。ちなみに「羅」の方は「連ねる」とか「薄絹」という意味である。「切れ込みのある薄絹のような花」という意味であろう。花卉の先にはナデシコ科の植物によく見られる細かい切れ込みが顕著に現れている。日本に渡来したのは江戸時代になってからといわれているが定かではない。耐寒性が強く土質を選ばないことから、観賞用として庭園などによく栽培されるが、最近ではあまり見られなくなってしまった。高さは30~80cm ほどになり、初夏の頃、花径5cm ほどで朱赤色の美しい花を開く。園芸品の中にはサラサガンピといわれる紅白の花の咲くものや、クルマガンピといって3枚の葉が、輪生するものなどがよく知られている。

一方センノウはナデシコ科の多年草で原産地は中国、ガンピによく似た朱赤色の花を7月頃に咲かせる。節のある茎は50cm ほどに伸び、葉は茎の節から対生する。花色は多くのものが朱赤色もしくは鮮赤色だが、白や絞りのものもあり、山野草を扱っている店などで売られている。和名の起こりは嵯峨野の『仙翁寺』で栽培されていたため、中国では『剪紅紗花』といわれている。「紗」の意味は、ガンピの「羅」と同じ薄絹のことで「羅紗」(ラシャ)といえお解かり戴けるだろう。

センノウ属は世界に約30種あるが日本には6種が知られており、花色が濃くて鮮やかな『松本仙翁』や、節のところが暗紫色を帯びた野性種の『節黒仙翁』などが栽培されている。この松本仙翁の名前の由来は花の形が、松本幸四郎の紋である「四つ花菱」によく似ていたためである。学名は『*Lychnis senno*』で、属名は燃えるようなこの花の朱赤色から「炎」を、種小辞は「仙翁」そのものである。ヨーロッパでは同じ属のアメリカセンノウを「マルタの十字架」または「エルサレムの十字架」と呼んでいる。その意味するところは、花の色が十字架に張り付けられたキリストが流した、血を思い起こさせるためといわれている。

ガンピやセンノウの持味は、花色の鮮やかなことである。しかし支柱を立ててあげないと、根元から倒れてしまうことも多い。また花の頃に夜盗虫に蕾を食べられてしまうので、注意が必要である。繁殖は株分けで春先、芽出し前に行うのがよい。



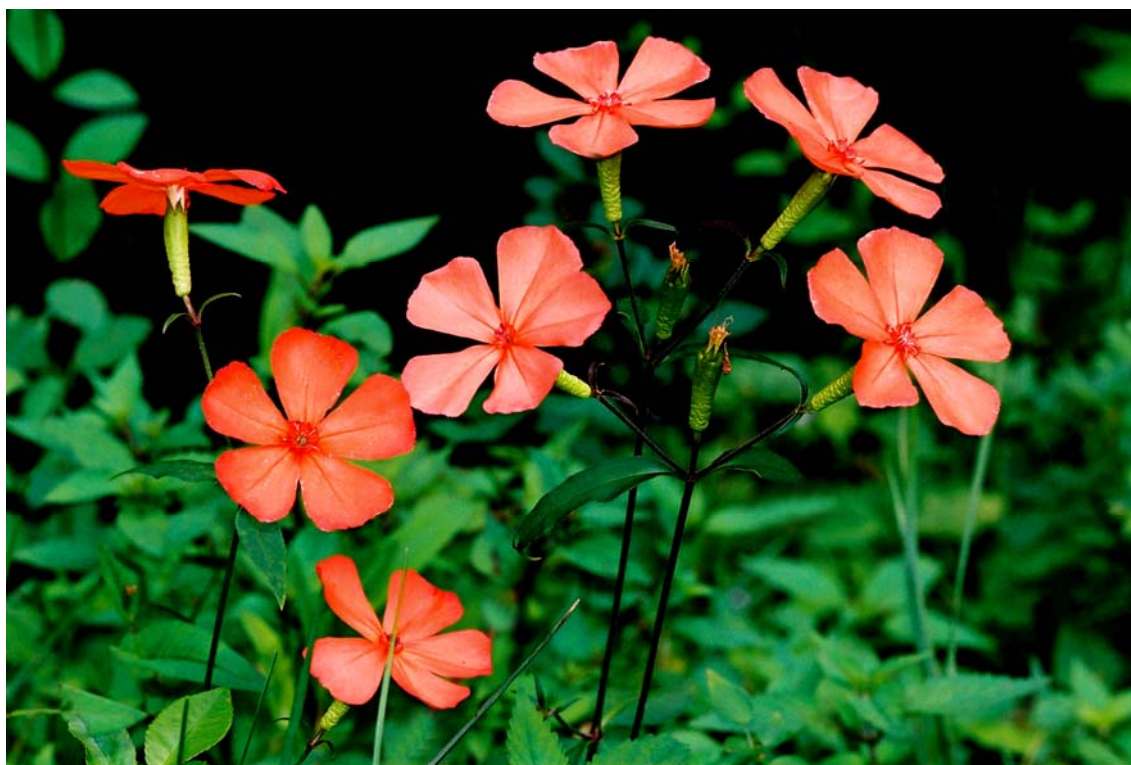
ガンピには弁先に不規則な切れ込みが多くある。中国では『春剪羅』もしくは『夏剪羅』とよび、剪は切るという意味で、この切れ込みを表現したものと思われる(栽培品)。



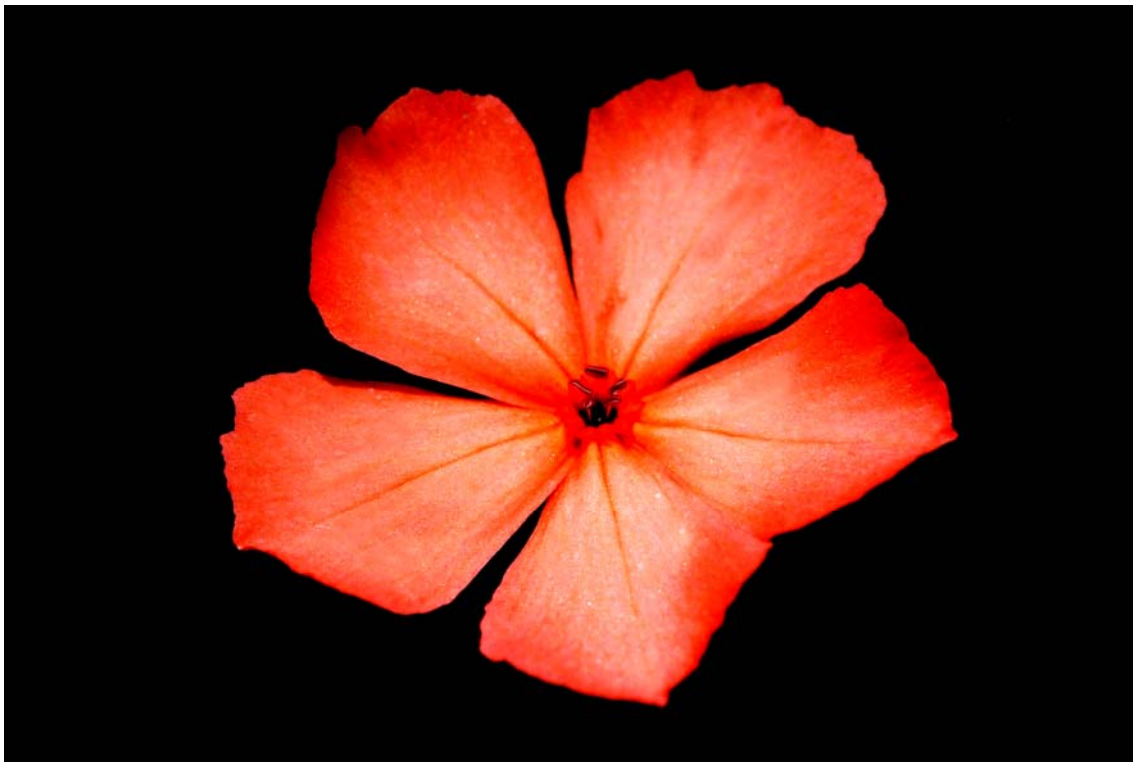
センノウの花、ガンピよりよりも幾分赤みがかった花色である。



フシグロセンノウは花柄の節が黒くなっているためにこの名が与えられた。中国での呼称は『剪紅紗花』で、紗は薄絹を意味している(長野県北相木村)。



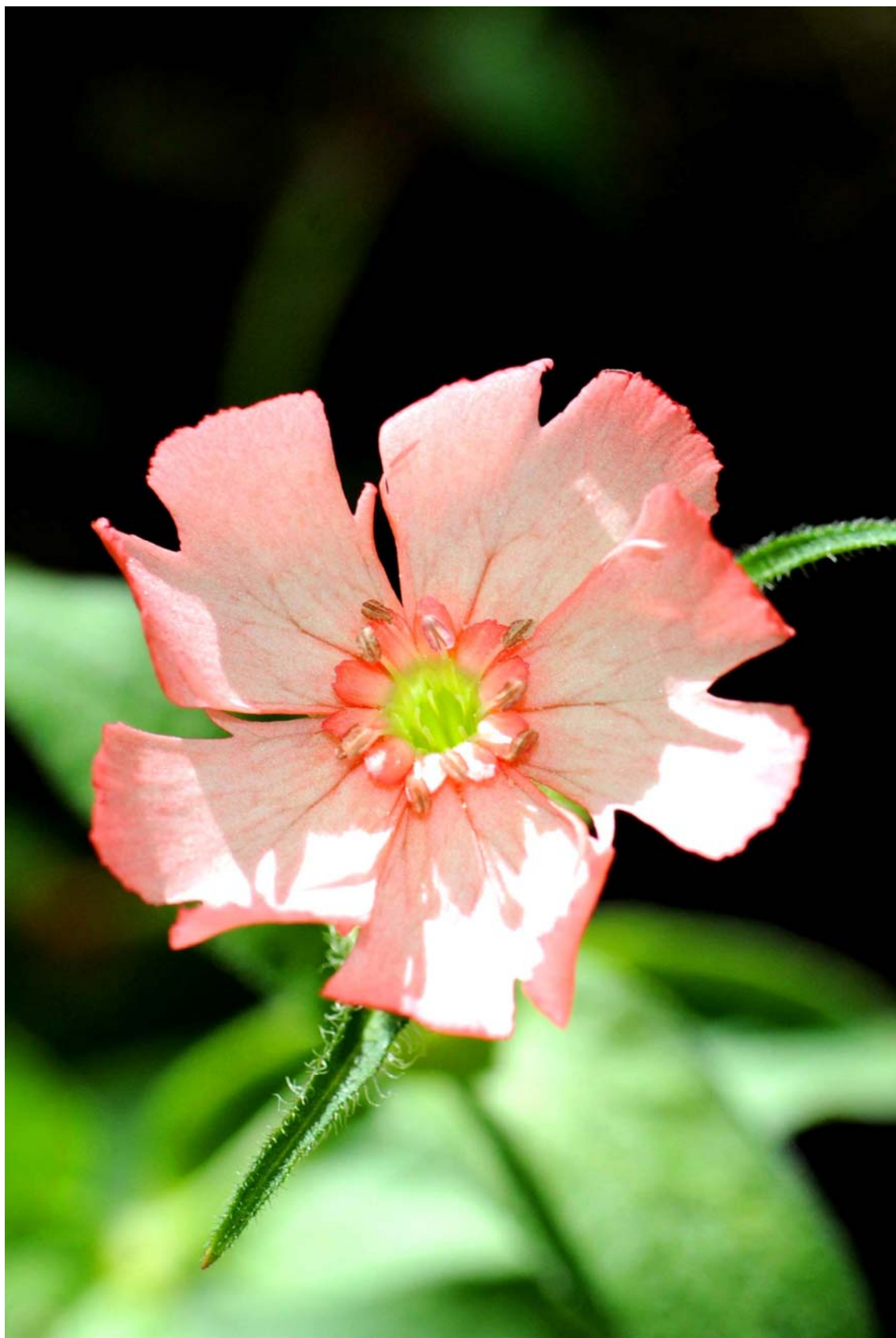
フシグロセンノウは山間地の溪谷沿いなどでよく見かける(長野県北相木村)。



マツモトセンノウは花の形が、歌舞伎役者である松本幸四郎の家紋に似ているところからこの呼称になった(栽培品)。



燕尾センノウは細い花弁の形をツバメの尾にたとえたものである(栽培品)。



センノウは花の形や色の変化が多く、こんな色のものもある(長野県軽井沢町)。



花の乏しい季節、森の中でひっそりと咲くセンノウには、言葉では尽くせない魅力がある。



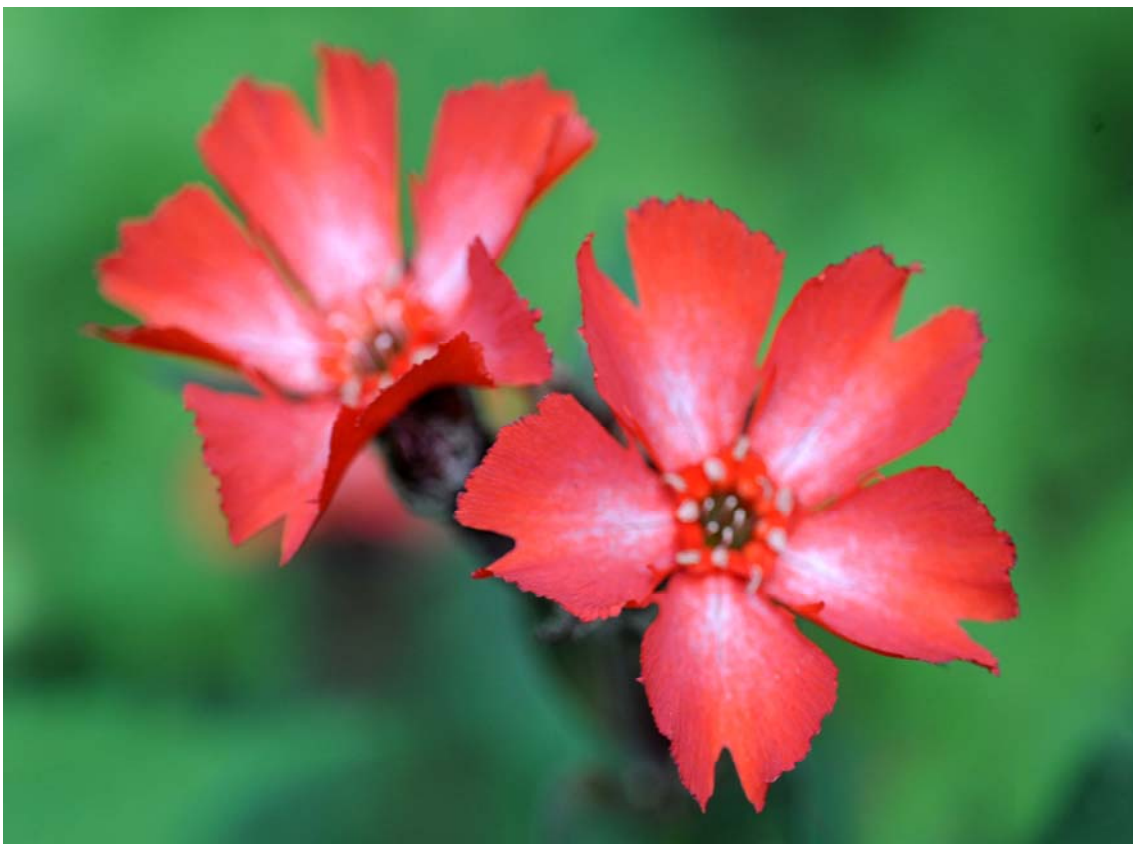
これは咲き始めの花か、やや弁先が内側にカーブしていた。しかしどちらにしろ夏の盛りは近い。



一輪だけ取り出してみるとこんなにも優雅な花であるが、季節がら虫に食われやすい(軽井沢町)。



センノウは種子で殖えるために変種が多い。これは底白のセンノウである。



しかし真夏の季節に野にさく花で、センノウに勝る鮮やかな花は殆どない。



センノウの赤い花と白い花(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)